HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	薬学部附属薬用植物園
Author(s)	眞崎, 睦子; MASAKI, Mutsuko
Description	北大施設探訪
Citation	リテラポプリ, 25, 15-15
Issue Date	2006-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42594
Type	article
File Information	masaki_LP25-15.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大施設探訪

薬学部附属薬用植物園

言語文化部　眞﨑　睦子

▶薬学部で用いる教材植物の標本園、ならびに研究用栽培園として、1956年に設営された。薬学部本館に隣接し、北大の敷地の中央部に位置している。総面積6,272平方メートル（約1,900坪）で、標本園・樹木園・栽培園・実験栽培園・温室に区分されている。標本植物は162科1,246種に及んでいる。優れた緩下作用をもつ大黄と、苦味生薬として知られるゲンチアナが、本園の代表的薬用植物である。

「フ・イ・リ・イ・タ・ド・リ」

春もそろそろ終わりのはずなのに冷たい空気が漂う朝、人気のない道でひとりつぶやいてみた。

北大への入り方はいくつかある。言わずと知れた正門、そして銀杏並木の北十三条門、遠友学舎を右手に急ぐ北十八条の道、西の原生林のほうからは自転車の往来も多い。二〇〇四年四月に北大に職を得た私が好んで通っていたのは、北十二条より少し南にある名前のない門である。ここからだとあまり多くの人に会わずに、立ち止まりながらも歩をすすめることができる。すると右側に濃色の土の一帯が現れる。ここが薬学部附属薬用植物園であると気がつくまでに私は表示されている植物の名前をいくつか諳んじることができるようになっていた。フイリイタドリは最初におぼえたそれである。葉は人の掌くらいの大きさで名前の通り白い斑が入っている。美しい、と思ったことはなかった。しかし私は――やっとのことで憧れの大学に辿りついたにも関わらず、知人の一人もいない北海道で、もののみごとに五月病にかかった私は――来る日も来る日もこの薬草園へ続く道を踏みしめ、地味な薬草たちの名前を確認し、弓道場の横、サクシュコトニ川を往く水に導かれるように大野池が目の前に広がる中央道路へと押し出された。

ある朝、三人の先客がフイリイタドリの前に。おじいさんがおばあさん二人に何やら話している。

「われわれは戦時中このイタドリを煙草の代用品として使っていましてね……」

「えっ、それ、本当ですか？」

我ながらこういう割り込みはいつもはしたない。しかし、この交わりがよほどうれしかったのだろうか、私の胸のつかえのようなものは瞬時にどこかへ溶け去った。そして緑に白の不規則な紋様染めは一層鮮やかに周囲に映えた。

早速、北大内の草花に詳しいIさんの部屋に走り、この話をしたところ、「イタドリってどうしてそう名付けられたか知ってる？」という問い。ああ、痛みを取ってくれるから？（但し、一部に伝わるこの名の由来について、牧野富太郎は「本当かどうかわからない」としているそうである。）それにしても私の心の痛みまで和らげてくれるなんて。さすが薬草である。

フイリイタドリ、ヘビイチゴ、サッサフラス、カスカラサグラダ……。緑のフェンス越しに唱えるだけで何かに効いてきそうだ。どうぞ一度お試しください。（注：薬効には個人差があります）

（まさき　むつこ）